



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 173号 2010.10.16 発行 社会政策研究所

きいてほしいことは、きいてくれる人がいないと きいてもらえない

最近の新聞記事から、子どもの暴力についての特集号です。従来の捉え方だけでなく、「子ども被害者学」という新たな切り口にも期待がかかります。このことはまた、大人の知的障害者の暴力とも共通した課題でもあります。【kobi】

社説：暴力といじめ 荒れの低年齢化を阻もう

西日本新聞 2010年10月11日

このデータは、やはり気になる。

文部科学省の調査によると、2009年度中に全国の国公私立すべての小中高校で確認された児童・生徒による暴力行為は、6万913件と初めて6万件を超え、過去最多を更新したという。

調査対象に国立、私立も加わった06年度以降、増加は4年連続である。件数が増え続けているだけではない。

この間、件数は高校では約1万件でほぼ横ばいなのに対し、中学校は4万3715件で1.4倍に、小学校に限ると7115件で1.9倍になった。暴力の低年齢化に歯止めがかからないのだ。

「教師に素直に従わない」「指導すればするほど反発し、暴力が増える」。本紙は、こんな福岡県教委の担当者の言葉を紹介した。こうした深刻な事態が中学校は言うに及ばず、小学校でも珍しくなくなったということであろう。

「感情を制御できない」「コミュニケーション能力が足りない」「規範意識が欠如している」。文科省が挙げる暴力行為が増えている要因だ。いずれも最近、よく耳にする子どもの特徴でもある。

他方、子どもの実態に詳しい識者の間には「家族関係や家庭の貧困、学力不足などが原因で子どもの荒れにつながるケースがある」と指摘する声もある。

一方で、今回の調査によると、全国の小中高校で認知されたいじめ件数は7万2778件と、3年連続して減少したという。12万件を超えていた06年度と比べると、4割以上も減っている。

ただ、額面通り受け止めるわけにはいかない。いじめの有無を子どもに聞くアンケートをしない学校が増えている。いじめ把握が不十分だとするなら問題だろう。これも気掛かりなデータである。

いじめ自体、相手を思いやることなく心を傷付ける一種の暴力である。そのいじめも06年度以降、件数は小中が逆転し、小学校が多数派になっているのだ。

暴力行為などが繰り返されれば当然、警察などとの連携が必要となる。コミュニケーション能力や規範意識をはぐくむ方策も真剣に考えるべきだろう。だが同時に、問題行動に走る子どもたちの「心の内」に入り込む努力が不可欠だ。

暴力行為にしる、いじめにしる、学校だけでは対処できない。都道府県教委や市町村教委の支援はもちろん、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど専門家との協力、さらには家庭との連携が欠かせないはずである。

いじめでは熊本県が、子ども千人当たりの認知件数で30・1件と全国最多となった。独自にいじめアンケートを実施し、丁寧にいじめを掘り起こしてきた結果であり、指導に生かしているという。こうした先進例も参考にしたい。

文科省は暴力行為対策など「これまで講じてきた施策」の総点検を実施しているという。子ども心に、どこまで向き合っているか。教委や各学校も、あらためて現場を見つめ直してほしい。

ジグザグかがわ：小中高暴力行為、全国ワースト1 - - 09年度 / 香川

毎日新聞 2010年10月2日

小学校で広がり “ささいなこと” 契機 県教委、防止策策定へ

文部科学省が発表した09年度の「問題行動」調査で、県内の国公私立の小中高校で起きた暴力行為件数は1194件（前年度比86件増）。1000人あたりの発生件数は10・7件で、全国ワースト1だった。なぜなのか、また、その対策は？【広沢まゆみ】

ある公立中学校で昨年12月、女子生徒が「なんでや」と女性教師に詰め寄り、突き飛ばすなどの暴力を振るった。女性教師から授業に出ず保健室にいたことを注意され、腹を立てたのだった。

けがは皮膚が赤くなる程度だったが、生徒は普段から教室にある植木鉢を壊すなどの問題行動があり、学校側は保護者に連絡。生徒には「警察に被害届を出す場合もある。粗暴な行いを改めなさい」と暴力の重大さを伝えた。家庭内での対話を増やすなど保護者の協力もあり、生徒は泣きながら謝罪したという。対応した生徒指導の男性教師は「暴力のきっかけは本当にささいなこと。生徒が教師や親に『自分のために心配をかけた』と感じられれば問題行動はなくなる」と話す。

全国ワースト1となったことを受けて、県教委の細松英正教育長は「極めて憂慮すべき状況」とコメントを出した。問題行動の背景について、家庭の教育力の低下 子どもを取り巻く環境の多様化・複雑化による規範意識の低下 感情のコントロールができない子どもの増加 - - を挙げている。

義務教育課は「小学校の暴力行為の全体的な広がりが気になる」と話す。県教委発表の問題行動調査によると、発生した学校は、08年度の24校から、09年度は36校に増加。特定の児童が何度も問題を起こすケースが多かったが、不特定多数が起こすようになってきたという。

「細かい報告の結果」の見方も

一方、県教委と連携して小学校を対象に「問題行動防止プログラム」を作っている香川大学の七條正典教授は「ワースト1になったのは、軽いケースも細かく数えた結果とも言える」と指摘。県内の暴力行為で、被害者が病院で治療を受けたのは全体の19・0%（227件）だった。全国平均の19・2%と大差はない。県教委は『注意した教師の手を払いのける』などの暴力とは言えないようなケースも報告するように求めており、現場の教師からは「どこまで数えるかは微妙」と戸惑う声も聞こえてくる。

七條教授は「今後は数値よりも事後の指導や対応に重きを置くべき」という。プログラム策定には09年度から取り組み、今年度末までに完成させる予定だ。問題行動の早期対応によって深刻化する前の防止に狙いがある。

指導や対応は従来、担任教師1人に任されることが多かったが、教師間で協議し、まとめ役も置く。教師だけで不十分な場合は、児童相談所やソーシャルワーカーなどの専門家

と協力する。七條教授は「児童を多面的に理解し、信頼関係を作る必要がある。ストレスを早期に取り除くことが大事」と話している。

新教育の森：子どもの暴力 学校指導に限界 件数過去最多...警察や児童相談所にSOS

毎日新聞 2010年9月25日

文部科学省が発表した09年度の「問題行動調査」で、小中高校生による暴力行為の発生件数が、過去最多の約6万1000件に上った。エスカレートする子どもの暴力に学校現場が悲鳴を上げている。【井上俊樹】

抱え込まず協力求める

今年6月、福岡県内の公立中学校で、30代の男性教師に殴りかかり、けがをさせた3年生の男子生徒(14)が傷害容疑で逮捕された。

「戻らんか」。生徒は授業中に教室を抜け出してサボっていたところを、担任でもあるこの男性教師に注意されて激高し、顔面を6発殴ったという。傷を負いながらも教師は生徒を校長室に連れて行き、110番通報して駆け付けた警察官に引き渡した。

地元の警察署によると、この生徒は2年生のころからささいなことでキレて、度々教師らに対して暴力を振るっていたという。「学校の指導だけでは限界でした」。逮捕後、学校側が警察に提出した上申書には、生徒の暴力に苦しむ現場の苦悩が書かれていた。

学校は従来、児童生徒の暴力を極力表ざたにせず、学校内で解決しようとする傾向が強かったが、近年は警察など外部機関にも積極的に協力を求めるようになった。文科省の調査によると、加害児童生徒(小中高)への対応に警察が介入したのは、07年度5161人、08年度5320人、09年度5714人と年々増加。児童相談所と連携したケースも07年度の1646人から09年度は2010人と2割以上増えた。

09年度の暴力行為6万913件のうち、教師や同級生らを相手にした暴力は4万4309件。このうち、被害者が病院で治療したのは26・4%の1万1708件に上り、教師に限っても22%になる。文科省も「凶暴化する中で、学校で抱え込むべきではない」(児童生徒課)という立場だ。

弱くなった教師の立場

今も学校現場には、警察の介入に抵抗感がある。だが、中学校の教師経験もある鳴門教育大学院の阪根健二准教授(生徒指導学)は「将来を考えれば、悪いことをしたという罪悪感を学ばせることで立ち直りのきっかけを与えることになる。暴力行為の背景にはさまざまな要因があり、警察など複数の機関が連携して多面的、多角的に支援することが必要だ」と指摘する。

ただ、こうした状況の裏を返せば、学校の指導力低下の表れとも言える。その一因として、学校側が「体罰」と訴えられることを恐れるあまり、暴力的な生徒にも強い指導をしづらくなった、と指摘する声は多い。

首都圏の公立中学の校長は「教師の立場が弱まり、持ち物検査すら難しい時代。子どもたちも教師が手を出せないと分かっているので、意図的に挑発してくる」と嘆息する。この中学では数年前、暴力などの問題行動を繰り返す生徒への指導に悩んだ教師2人が相次いで辞めた。「今の学校には力がない。警察に頼らざるを得ないのです」

どうしてすぐ手が出るの

傷つきやすく我慢ができない 格差社会、すさんだ家庭も背景に

「悪いことをして注意されると逆上して、教師の胸ぐらをつかんだり、殴ったりする。生徒指導の最前線にいる先生ならば、誰しも経験があるはず。けれど、最近はしかられたわけでもなく、理由もなしにいきなり暴力を振るう生徒が増えている」。東京都内の公立中学の男性教師(46)は今の子どもたちの行動に首をかしげる。

30年以上子どもたちの作文指導を続け、教育評論家としても知られる国語作文教育研

研究所の宮川俊彦所長は「言いたいことを何でも言っているという風潮が強まり、思ったことをすぐに口に出す子どもが増えた。その結果、相手との間に誤解やあつれきが生じてしまう。しかも相手が理解していないとなった時に、暴力という直線的な行動に出る子どもが増えている」と語る。

小学生の暴力行為が急増するなど、暴力の低年齢化も最近の特徴だ。元中学教師で「学校崩壊」などの著書がある日本教育大学院大学の河上亮一教授は「最近の子どもたちは傷付きやすい。大人が我慢することを教えないから我慢もできない。同級生や先生にすぐ手を出す小学生が増えるのも自然の成り行きだ」と言う。

もっとも、子どもの暴力は今に始まったことではない。70年代から80年代初頭には日本中で校内暴力が吹き荒れた。だが、河上教授は「当時はPTAや地域に何とかしようという雰囲気があったが、今の学校は地域の支えもなく孤立無援。親も以前のように学校に重きを置かず、『先生の言うことを聞きなさい』と家庭で教育もしない。その結果、教師が単独で子どもと向き合わざるを得なくなった」と分析する。

鳴門教育大学院の阪根准教授は、子どもの暴力の背景に社会的格差拡大を挙げ、「リストラや能力主義の拡大などで格差が広がり、親も社会から置いてきぼりになるような状況で家庭もすさんでいる。子どもが荒れるのも仕方ない」と指摘する。

6万913件、小中学生は増加

09年度の小中高高校生による暴力行為発生件数は6万913件で、前年度より2.2%増加した。内訳は小学校7115件(9.7%増) 中学校4万3715件(2.2%増) 高校1万83件(2.9%減)。発生状況別に分類すると、(1)生徒間暴力(56.3%) (2)器物損壊(27.3%) (3)対教師暴力(13.6%) (4)見知らぬ人らへの暴力(2.8%)の順。加害児童生徒は小学生6814人 中学生4万4566人 高校生1万2530人。

東京開催のフォーラムですが・・・

<朝日新聞厚生文化事業団からのお知らせ>

子どもへの暴力防止フォーラム2010「子どものこえに耳を傾けること～『子ども被害者学』のススメ～」を開催します

きいてほしいことは、きいてくれる人がいないと きいてもらえない

開催にあたって

日本中の、子どもにかかわるすべての人と、子どもをまるごと支援するネットワークを構築するために、新しい光のもとで子どもの被害を再考しませんか。

これまで子どもへの暴力被害は、身体的虐待、ネグレクト、性的虐待、いじめ、貧困、ドメスティック・バイオレンス環境.....など、各々がばらばらに扱われてきました。一方で、このように断片化されてきたために見落とされている子どもの被害の深刻さと複雑性。その多様な被害のかたちが交差するところに光をあて、子どもの発達のあらゆる段階におけるすべての被害を総合的に捉える新しい視点が「子ども被害者学」です。この「子ども被害者学」は、米国ニューハンプシャー大学社会学部のデービッド・フィンケルホー教授によって提唱された子どもの被害にアプローチする新たな考え方です。同教授は、子どもと女性への暴力に関する統計調査研究における第一人者として、子ども虐待の国際的分野に大きな影響を与えてきました。このたび、「子どもへの暴力防止フォーラム 2010」に、そのデービッド・フィンケルホー教授をお招きし、「アメリカでの子ども虐待の大幅な減少とその理由」の報告をまじえ、子どもへの暴力について子どもの立場から暴力全般を考えることの意味や、子どもを大切に作る社会をつくるために私たちができることについて、2日間にわたって考えます。子どもへの暴力防止に関心のあるすべてのみなさんのご参加をお待ちしています。

子どものこえに耳を傾けること～「子ども被害者学」のススメ～
子どもへの暴力防止フォーラム 2010

と き 2010年10月30日(土)～31日(日)

ところ 有楽町朝日ホール 東京都千代田区有楽町 2-5-1 有楽町マリオン 11階
・ JR有楽町駅、東京メトロ有楽町駅、銀座駅から徒歩2分

対 象 子どもへの暴力防止に関心のある市民

参加費 5,000円

定 員 600人 定員になり次第締め切ります。

プログラム

【10月30日(土)】

10:10～10:30 「子どもからのメッセージ」

10:30～12:00 基調講演「『子ども被害者学』のススメ」

(デービッド・フィンケルホー・ニューハンプシャー大学社会学部教授)

12:00～13:00 昼食

13:00～14:15 「子どものこえが社会を変える」(影山秀人・日本弁護士連合会子どもの権利委員会委員長)

14:15～16:00 「『子ども中心』が被害を防ぐ～子どもの人権の視点～」

(デービッド・フィンケルホー、森田ゆり・エンパワメント・センター主宰)

17:30～ 交流パーティー

【10月31日(日)】

10:10～11:30 「米国の虐待の減少から学ぶ～調査研究から～」

(デービッド・フィンケルホー)

11:30～12:30 実践発表

チャイルドライン支援センター

スクール・セクシャル・ハラスメント防止全国ネットワーク

社会的養護の当事者グループ全国ネットワーク「こどもっと」

12:30～13:40 ポスターセッション・昼食

13:45～15:45 パネルディスカッション「『子ども中心』によって明らかになる暴力～性的虐待～」(坪井節子・カリヨン子どもセンター理事長、奥山眞紀子・国立成育医療研究センター医師、森田ゆり)

15:45～16:00 「子どもからのメッセージ」

内容についてのお問い合わせ先

朝日新聞厚生文化事業団「子どもへの暴力防止フォーラム」事務局

tel. 03-5540-7446 fax. 03-5565-1643

〒104-8011 東京都中央区築地 5-3-2

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行